

## 第9回日本赤十字臨床衛生検査学会を実行に当たり

第9回学会実行委員長（姫路）

堀 坂 守

### 1. は じ め に

第9回日本赤十字臨床衛生検査学会を平成6年6月4日～5日の両日、世界文化遺産指定を受けた白鷺城の聳える姫路市キャスパホールに於いて開催いたしました。両日も良い天気にも恵まれ、吉岡顧問始め佐藤前会長・赤臨技本部役員・全国各地より多数の会員の出席をいただき盛会に開催できました。出席会員の積極的な協力と実行委員各位、又姫路日赤検査部スタッフの御尽力により、スムーズな進行ができましたことを感謝致します。

### 2. 開催経緯と実行委員会の発足

第1回が近畿ブロックで始まり全国8ブロックを一巡して、第9回学会は近畿担当となり、平成4年3月14日技師長・責任者会議において、全国的知名度の高い京都で、と意見もありましたが、笠井会長のお膝下の姫路で、ぜひとの皆様の要請があり、病院長を始め上司の承諾を得てお引き受けすることになり、第9回（平成6年）の学会開催へ向かってスタートしました。

早速、検査部管理者連絡会議を開き、学会開催への全力投入、協力を話し合い具体的なスケジュール表を作成し、取り組みました。

旭川赤十字病院の高橋春秋技師長より充分なる参考資料をお送りいただき大変お世話に

なり感謝しています。

その後、実行委員会学会運営組織図を構成し、学会長、副学会長、実行委員長、副実行委員長（兼務会計）、総務（3名）、会場（3名）、学術（3名）で発足いたしました。近畿ブロック担当なので、他施設の方々も含む役員構成についても考えましたが、度々の会合に遠路お出で頂くこと、経費、時間的にも無駄が多くなることを考慮して、当院の技師を中心に構成して他病院の責任者の方には、大西副学会長（大阪）を除き参与としてご協力をお願いすることを、近畿ブロック技師長・責任者会議（H5. 3. 13）でご承認頂きました。

### 3. 学 会 企 画

学会企画に当たりましては、笠井学会長より骨子として、学会のメインテーマに Alexis Carrel の「人間、この未知なるもの」、サブタイトル「自然科学と人類の調和」が提案され、実行委員会において検討し、内容的には人間の好奇心は科学を極致までに発展させる。人間性疎外という副作用を残しながら……。学会は、技師にとって技術、学術の研鑽は大切ですが、今学会では接遇の真髄であり人間に最も大切な「心」、「愛」について取り組むことに致しました。

(1) 特別講演には学校法人ノートルダム清心



学園理事長の渡辺和子先生に「現代の忘れもの」をテーマに講演をお願いしました。特別講演、渡辺先生の「現代の忘れもの」と学会テーマがどのように調和融合するかが、笠井学会長が今学会に賭けられるストーリーであり、シークレットキーワードは「心」、「愛」でありました。

物静かにセツセツと説かれる美声が、ホール全体を一体となすあの空気感、緊迫感の中で善良なる我ら全国の仲間達は久しぶりの感動に目頭を熱くし光るものを見ました。

- (2) 教育講演は2題、1題は当院の第3内科部長奥新浩晃先生に「C型肝炎とインターフェロン療法の現況について」、もう1題は姫路血液センター検査課長河瀬正晴先生に「輸血事故を起こさないための輸血検査」をテーマにご講演をお願いいたしました。

奥新先生の講演では、インターフェロン療法の豊富な臨床症例の説明で薬効や基礎的なイロハをご講演いただきました。

河瀬先生は、これまでに発生した輸血に関する医療事故の新聞記事等を紹介され、会員の皆様も身近に感じられ、又、気分を引き締められたことと思います。

- (3) 一般演題は42題の発表がありました。日臨技学会と前後致しましたので、演題募集を懸念致しましたが、締切間際に投稿が過半数を占め、最終には43題集まり、後日投稿の問い合わせには、申し訳なく思いましたが、お断りいたしました。また、年をあけてから、1題断りの電話があったため、最終的には42題におちつきました。

#### 4. 広告及び展示

学会運営の財源面は抄録広告料等での協賛

各社のご支援を負うところがおおきいのですが、バブル崩壊後の各社厳しいおり、なかなか広告集めも苦慮致しましたが、笠井学会長のご尽力により、広告・協賛は30社の協力を得て何とか抄録集費は賄えました。

#### 5. 広報宣伝

学会開催のPRとして、会期1年前に写真家内藤照義氏提供の朝焼けの姫路城（白鷺城）のポスターに、学会テーマ・日時並びに場所を明示してお知らせいたしました。ついで、10ヶ月前に学会案内、抄録演題・原稿の締切等を掲載してご案内いたしました。約2ヶ月前に学会参加のお願い、宿泊申し込み等を送付し、1ヶ半月前に抄録集をお配りいたしました。

#### 6. 学会の経費

- (1) 学会を開催するに当たり悩みの種は、運営費をいかに捻出するかという事であります。井の一番に、会場の予約等すぐ経費がかさむ事がありましたが、当院の岡田康男院長より「全国から、姫路に来ていただくのであるから、恥ずかしくない立派な学会を開催しなさい。」と全面的なご理解、ご支援のバックアップをいただき、即、当番病院として助成金50万円の交付を頂き基金と致しました。

近畿ブロック担当なので、当院の天川勝義事務部長は近畿事務部長会において、助成金のご支援を依頼にお骨折りいただき、おかげさまで近畿ブロック13施設の病院より助成金80万円のご支援を賜りました。

- (2) 丁度姫路市においても、世界文化遺産姫路城指定記念キャスティバル'94の開催中であり、当院の黒川光男参与のご尽力に



より、姫路市の後援を頂き学会会場の優遇、補助金20万円を頂戴いたしました。

- (3) 協賛メーカーより、抄録広告29社、パンフレット展示3社、計96万円のご支援を賜りました。
- (4) その他の収入として、学会参加費（懇親会費、祝金含む）205万円、赤臨技よりの助成金60万円、収入合計5,120,430円となりました。
- (5) 支出の大きいものは、懇親会費、抄録集、会場の使用料及び運営費等々となっております。

## 7. 開 会 式

盛会な意義ある学会を願う儀式的開会式には、ご来賓に姫路赤十字病院の岡田康男院長をはじめ、日本赤十字社本社の本多典久企画指導課長、姫路市より戸谷市長代理として片岡万宜健康福祉局長、日本赤十字社兵庫支部の荻野賢治事務局長、兵臨技の福田邦昭会長、赤臨技顧問の吉岡稔先生、赤臨技の特別会員（前会長）の佐藤春江先生らの多数の方々をお迎えして、先ず学会長でもある笠井会長より、学会開催の挨拶を行い、岡田院長、本多課長、片岡局長、福田会長のご祝辞として、激励、期待、歓迎の言葉を頂き、星岩雄次期学会長の福島学会への招待の挨拶と盛大に行うことが出来ました。

## 8. 懇 親 会

懇親会には、来賓の本多課長（本社）、荻野局長（兵庫支部）に加えて、特別講演、渡辺和子先生のご参加を頂き、当院、天川勝義事務部長に歓迎のご挨拶をしていただきました。吉岡顧問に乾杯の音頭をお願いして、会を盛り上げていただきました。本多課長、荻野局

長を交えて、懇親あり、感動、感激の渡辺先生と皆様の懇談は先生とのご一緒の記念写真撮影リクエスト等もあり、感涙されておられました。また、当院の鍋山副院長もお忙しい中、参会していただきました。アトラクションとして新舞踊を朝香流志麻会の方々をお願いして、学会シークレットキーワード「心」の舞踊題をトリに披露願ひ、より一層会は佳境に入り、全国会員の病院検査部においての色々厳しい情勢での情報交換、親睦、困難打開策と話もつきなく時間のたつのも忘れ、名残を惜しみながら閉会といたしました。

## 9. 行動及び反省

学会参加は実行委員の殆どの者は十分な体験がありますが、開催する立場は皆未体験のものばかりですので、裏方また内側からの学会の取り組みは、不安が一杯でした。しかし、実行委員会をたびたび開くに当たり、委員の意識も高まり、徐々に輪郭もはっきりと見えてきだし、自信もわいて参りました。

学会後の反省としては、土曜日が休みでなく、スタッフの割り振りに苦慮したこと、金銭面の調達の大変さ、担当部署の交代要員の不足、部署により多少手順の不備、来賓者、講演者等の誘導の戸惑いなどがありました。

また、良き点として、混乱が予想された受付はスムーズに行えました。進行に関しては、順調にいきました。週休2日の予定がはずれ、スタッフ数が不足ではありましたが、十分に対応でき、学会のストーリー、即ち学会テーマと特別講演の内容が心地良く一体化し結びついていき、多くの好評を頂き、結論として学会は成功でした。



## 10. 学 会 参 加 者

本学会の参加者は269名でした。

一般会員	194名	(68施設)
来 賓	7名	
招 待 者	6名	
一 般	22名	
関係各社	40名	

一般会員参加者のブロック別は北海道8名・東北10名・東部40名・中部12名・近畿90名・中国15名・四国8名・九州11名合計194名  
懇親会には220名のご参加を頂きました。

## 11. 最 後 に

今回学会を担当するに当たり、学会テーマをじっくり噛みしめながら、文明とは、本来、科学的技術の進歩とその実用化により、人間に豊かさをもたらすはずのもの、言い換えれば、人間の負担を軽減して精神的にゆとりを

もたらすはずのものです。ところが現実とは違って、むしろ逆の現象が起っています。

今や、コンピュータの時代です。検査機器もほとんど導入されています。コンピュータは理屈が分かっているなくても、その操作方法さえ理解しておれば、答えをだしてくれます。これは大変便利ではありますが、しばしば、人間の意志や努力課程が、無視されてしまいます。職場でも家庭でも、分単位、秒単位で人間を忙しくさせています。いつのまにか、機械を使っているつもりが、使われて振り回されている自分に気づくときがあります。しかし、きずくだけまだ救われているのかも知れませんが……。

常に、心にゆとりをもち「愛」「思いやり」の気持ちで日々を過ごしていきたいと、学会テーマ、キーワードより、切に痛感した次第であります。



## 第9回日本臨床衛生検査学会を終えて

学 会 長

笠 井 直 幸

全国学会は第1回を近畿ブロック（大阪）で隔年に開催されて全国8ブロックをクリアし18年目に振り出しに戻って近畿ブロックに廻って参りました。

第8回の旭川学会（北海道）の直前に申し渡され、近畿ブロック技師長（代表者）会議の中で会長の地元姫路で施行することが決定し会長と学会長と二重苦の重責に最初は困惑いたしました。それと同程度の喜びと身に余る光栄で全身に倅せを感じたのも事実でありました。

北海道（旭川）学会で次期学会長の挨拶をさせて貰って始めてその実感を強く感じたものであります。

全国学会を施行するに当たり最初に考えたことは学会のイメージ、人集め、金集めであります。

それより学会のイメージと学会のストーリーを構築し学会のテーマを丁度読み終えていた「人間、この未知なるもの」 Alexis Carul（1912年ノーベル賞受賞医学博士）の内容から「近代文明が進めば進むほど、人間は不幸になっていく。これは近代文明が、ただ好奇心のおもむくままに、無軌道に発達しているからである。今後は、人間のあらゆる努力は、それが必ず人類の幸福と繁栄に役立つというもののみに向けられなければならない。今日人間にとって一番解かって無いもの

は、人間そのものだ」と主張されている。このことはある有名新聞紙上にて人間のあらゆる努力が人類の幸福と繁栄に役立つというもののみに向けられねばならないというところで批判されたこともあります。私にとっては、文明が人間性と引き替えに発達しているように思い、今一番憂っている事でもありました。

10年程前に、亡くなられたアメリカの未来学者マクルーハンもまた、テレビを始めとして今後、発達するであろうメディアは人間から人間性を奪い墮落させるだろうと予言している。（マクルーハンニズム）

事実、テレビは与えられた画面から吸収する能力はできるが考え、創造する能力を失い、電話の発達、文を書く必要性を少なくした。またワープロの発達は文字を忘れさせ、計算機の発達は計算能力を低下させたと思う。

これは、それを扱う主体者側に問題があるのだが、便利がそこにあればそれを使う。一旦使い出すともうそれから逃げることは出来ないのが、現実であります。

日進月歩、どんどん進歩発達してゆく医学の中で新しい疾病も発見され、疾病構造が著しく変化していく。その上、年齢的人口動態の変化が私達の検査にも、変化を余儀なくされていく。定められた保険制度の中で、合理化、機械化は止まるところを知らない。この



現実から必要にしてどんどん新しい医療器械、システムが開発されてくる。新しく導入された機械、システムに酔いしれて、マスターする。充実しているはずが、何か物不足さを感じる。これは、便利さ厳しいスピードの中で「心」「愛」の入る余地の無いからではなかろうか。

昨今、学会、研修会等で接遇問題を屢々テーマとして扱われて参りましたが、その内容が方法論、技術論であったように思われます。これはこれで実践的で結構かと思いますが、今回は接遇の真髄に迫り、優しい思いやりの心と、人やあらゆるものをいとおしむ愛について考えてみようと思い、学会のストーリーを構築し、シークレットキーワードに「心」「愛」としました。

特別講演に渡辺和子先生を求め、真剣にラブコールし愛読者の一人として、お手紙を差し上げお願いし、了解を得ました。渡辺和子先生はノートルダム清心学園理事長、日本カトリック学校連合会理事長であり、先生は幼児期に、日本史上知られる2・26事件即ち昭和11年2月26日、先生のお父上、渡辺錠太郎氏は時の教育総監で2月26日未明青年将校のため暗殺されました。たまたま同日、同室にておやすみだった9才の先生の目の前で43発の銃弾を蜂の巣の如く受け、流血と肉片が壁や襖に飛び散るさまを打ち震えながら目撃した唯一の肉親でありました。この幼児体験と今日の先生の哲学がどのように結びついたのかは凡庸な私には計り知れません。

聖心女子大学卒業後、上智大学で大学院を終了され、その後に米国ボストン大学にて学び哲学博士(P h . D)となられています。

演題に「現代の忘れもの」。この講演内容を私の定めた学会テーマがどのように結びつ

いていくか、私は賭けてみました。

もの静かな語り口調、美声の中で約250名の入ったホールは講演者と一人一人が一本の糸で結ばれていく緊張感、空気感はその講演内容に増して私を舞い上がらせた。

講演の中から、「樵が木を切る事ばかりを考え(生産性向上)自分の木を切る斧を労る手入れをする余裕さえない。」から始まって、「時間とは何だろう?時の使い方は命の使い方であって時の刻みは命の刻みである。」と言われた。

「物事に雑用なんて事はない。用を雑にするから雑用であり、無駄に見えても皿洗い、配膳の中でもそれを使用する人の幸せを祈りながら心こめて行うならば決して無駄ではなく自分自身が幸せになる。」と説く。

フランスのパイロット＝サン・テグジュペリが「星の王子さま」の中で「大切なものは目に見えない、肝心な事は心で見ないと見えないんだよ。」

ある医者が癌により足を切断、その後、肺へのメタスターゼのため死亡する。その医師の子供達への遺書の中から話され、その医師は「お前達も頑張って勉強して医者になりなさい。」とは言わなかった「お母さんを大切にし、思い遣りのある子に育ててほしい。」と会場を泣かせた。

お話の中でも一番印象深かったのは、マザーテレサ(=ユーゴスラビア人、ノーベル平和賞を受賞)がインドのカルカッタに「死を待つ人の家」を作り、癌末期患者、エイズ患者等を収容し看護している。この事によりノーベル平和賞をお受けになった。

彼女は記者会見の中で「世界にはまだ最悪の病が残っています。それは天然痘でもなければ癌でもありません。インドに蔓延してい



る、ハンセン病でも結核でもありません。自分は生きていても生きていなくても同じだと考える精神的孤独、精神的貧困と呼ばれている病気です。」と言われた。人に生きる葉は心であると。人間の心が今ほどやすらぎと温かさ、そして無条件の愛を求めている時もないと言ってよい。

ある日本人医師がマザーのところへボランティアで手伝って帰国し、テレビの中で「マザーの所には見るべき医療はなかったが、真の看護がありました。」と報告されている。

医療器械も何もない、でも死んでゆくとき「ありがとう」と涙を流してマザーの手を握る、これはIt is so beautiful. と言われた。It is so pretty. とは言われなかった。「美しい光景である。」と表現されている。

これは講演には無かったが「心に愛がなければ」の書の中に「今、益々合理化され、スピード化されていく時代に、そして人間が、自らを神の立場に置こうかという時代に私達は神の前に人間の限界を認める謙虚さを持ち、

人間にのみ可能なこと、つまり争いのあるところに平和を、憎しみのあるところに愛を、そして疑いのあるところに信頼の種を蒔く人でありたいと思う。」とあります。

また、ティヤール・ド・ジャルダンこう言っています。

「人間にはただ一つの義務しかない、それは愛することを学ぶことだ。人生にはただ一つの幸福しかない、それは愛することを知ることだ。」

私の思い出せる内容は断片的で的を得ていないかもしれませんが、90分と時間を感じさせない緊張と半ば興奮の渦の中で幕は下りた。

学会最終日、学会閉会式にて学会実行委員長堀坂守より「思い上がりの多い今日この頃、思い上がりではなく思い遣りの心を持って日々これ努めたい。」と結んだのも感銘深かった。

学会は269名の参加者で大盛会のうちに終了し、「元気でまた逢いましょう」を合い言葉として散会していきました。



